

# 新たな社会 への模索と キブツ経験

メナヘム・ロズネル  
大湯広定 訳

いずれの時代と国家に  
あっても、人類は共同  
体的生活原理の実現を  
試みてきた。この中で、  
イスラエルのキブツは  
唯一といえる成功をな  
したのだった。  
筆者は、その最近の工  
業化に起因する種々の  
変質をも含め、キブツ  
社会の本質的な機構を  
分析し、共同体的小社  
会の建設にあたってキ  
ブツ運動が教えるもの  
のあることを示唆して  
いる。

## はじめに

共同体的社会を志向する諸思想と、その試みの復興は、急進的な青年層の新たな、今より他の諸制度および文化の探求の一部として、我われの時代の社会現象の最も顕著なものの一つである。それに対して、これらの新たな試みが、はたして堅固な、持続する社会制度を現代工業社会において創り出し得るか否かは問題として残る。彼らの試みが挫折することとは、前世紀全般にわたっての十万にも及ぶ人々のアメリカ合衆国、その他さまざまな国における共同体生活への試みの失敗の記録に、さらにひとつを加えるだけに終るであらう。(訳注・オナイグ・ブルーデンホフ・アマナなどアメリカの試み。オーエン、フリーエ、などの試みも参照)

## 1 ユーゴスラビア

### での試み

自主管理的なユーゴの試みは注目に値する。この試みのはじまりは、前大戦の数年後で、ユーゴのソビエトブロックからの離脱を契機として着手された。理想的な民主的自主管理社会の実現には多くの障害があったとはいえ、

初歩的な労働組織という制約の中で、ユーゴ方式は部分的には成功したようである。労働者協議会による代表制、労働手段の社会化の方式を通して、労働者達は、彼らが運営に関与し、この試みの一端を担っていることを感じていた。

成功にはさまざまな段階がある。その相違は、地域の経済的、社会的発展段階に関連し、また組織体の規模と年数(内部機構は新しく、かつ大きな組織体など効果的に働く)に、そしてその構成員の人間性によっている。

近來明らかに成功を納めている重要なものは、分散された、小規模な経済単位集団を産み出したことであつた。しかし主要な問題は残されたままである。すなわち、自主管理化された小単位と、より大規模な社会との関係である。これは次の二つの問いを含む。

(1) いかにして全体的利益に対し障害となる、自主管理化された小単位の集団エゴイズムを克服するか?

(2) いかにして小単位集団および包括社会の官僚化をまぬがれうるか?

これらの問題は、各管理部門の公選役員ポストを規則的な交替に義務づける法の導入、地方単位および国家の各段階で、代議制民主

## 2 人間性と社会主義

過去二世紀にわたるこうしたさまざまな共同体的、あるいは半共同体的社会の試みは、次の二つの基本的な問題を提示している。

(1) かくもさまざまな試みの失敗は、共同体的原理による新たなよりよい社会の実現は不可能であることを証明するものであるのか?

主義のための付属機関を設けること、などにより解決が試みられた。こうした努力が決定的な解決をもたらすとはいえないが、ユーゴは現在もなお新たな試みをつづけている。

こうしたユーゴの実験は、労働者自主管理と自主運営思想の大衆化に寄与してきた。この影響は特に、急進的な青年層、および西ヨーロッパの工場労働者層に強く及んでいた。一九六八年五月、フランスでその運動の頂点に至った、大学決議過程への学生の参与を要求する闘争や、多くの工場での労働者による生産自主管理への闘争は成功していない。しかしながら、これらの新しい動きは、現代産業の疎外状況の克服と、同じくこの状況に起因する根底的な無力感の克服とをめざす、漸進的な動向を反映している。

(2) エーゴにおける部分的な成功は、たとえわずかの限られた成果でも上げうるためには、社会主義社会という大枠が必要とされるといふことを証明するものであるか？

(1) について、もしそうとする者は、社会制度は、人間の基本的な性格を反映し、人間に固有の精神的限界も含めて、その故に新たなよりよい社会の創造は不可能である、という悲観的観念にかたむく。(2) について、もしそうとするものは、より広範囲な根底的な社会変革が、いかなる共同体原理の試みにも先行する、という憶測にかたむく。

しかしながら、人類の自然との闘争から得た経験は、過去のたび重なる失敗にもかかわらず、新しいより高度化した知識のもとでは成功するかもしれぬことを教えている。同時に、人間の生活状態と、恐らくその社会的性格とは、肉体的条件より変わりやすい。もしそうならば我われは、社会科学における知識と技術の進歩と、より人間的な、疎外の少ない社会をめざす情熱との統合が、共同体的社会への試みの未来での成功を不可能にしないことを信じたい。

共同体的社会の試行錯誤について、こと細かに分析するのはこの小論の域を越えている。

キブツと他の試みとの相違は、共同生活体と社会の間の結びつきであり、それはある程度まではイスラエル社会の特殊な性格とその労働運動によるものである。しかし、相違点はまた、一般社会に対して開放的であり、内部では寛容であるという、キブツの基本的な特徴にも関係している。したがって、キブツ以外の試みの内包する二種類の主な弱点は、これによって避けられたのだった。変化する周囲の条件に必ずしも拒否したか、あるいは応じられなかった、閉鎖的共同体社会の古典的姿は、ここにはもはやなかった。と同時に、キブツはその価値観と基本的な理想の風化をも防ぎえたのであった。

## 4 個人と集団

前述した、より大きな社会との関係についての諸問題は、共同生活体内部の基本的問題と強く結びついている。個人主義的価値観をすでに自分のものとし、社会の中で孤立し、疎外されている人々で、どうして新しい社会を創ってゆくことができるか？ 個人的な自己実現と、より広範な社会的目標を持つ共同生活体の優先順の間に、固有の矛盾があるの

だが、それらのほとんどに共通する主要な問題点と、マルチン・ブーバーにより「失敗しなかった唯一の試み」と評された、イスラエルのキブツ運動によって案出された解決策とを明らかにすることはできよう。六十年を経てイスラエル全土に、二四〇のキブツが、九万四千の人口をもつて散在し、イスラエル農業生産物の三十三パーセント、工業生産物の八パーセントを生産し、国の政治、文化、教育の分野において、比類ない活動をしている。キブツ生活様式はもはや、一時的にのみ可能な現象としてではなく、充分現代工業社会に適合した、永続的かつ複雑な社会構造として存在している。

## 3 共同生活体と一般社会

### 一般社会

さまざまな共同体的試みに共通な基本的問題は、いかにして社会変革をめざす一般的な運動に、これらの試みを関係づけるかということである。これまでの共同体的試みの大半は、アメリカ的共同生活体から、フランスの労働共同体にいたるまで、より広範な急進的な社会運動からは隔絶されていた。その一因として、これらの社会運動が共同体的原理に

か？ 最大限の自己実現は社会的責任の重さと両立するものであろうか？

キブツでは個人的要求と社会的な要求との相互関係は、今日、かつてのあり方とはまったく異っている。この変化の好例は労働とその価値とに対する態度の変化である。メンバーのうち最初の世代のものにとつて、労働はパイオニア的犠牲と道徳的義務であり、それが果たされた時の満足感は大であった。第二世代にあつては、労働は個人的満足の一手段とみなされている。彼らは能力を発揮することや、知識を応用することのできる機会を求めていて、かつてのパイオニアの状態や、単純な経済機構の枠内では、彼らのその要請を満たすことはなほだ困難である。ところが今日、メンバー各人の求めるものが変わってきたことと共に、漸次多様化するキブツ経済の中で、より多くの専門家が必要とされる結果、満足できる仕事につく機会も増大しているのである。

もちろん、個人的要求と社会的義務との間を、どちらにも都合よく調整する自動制御装置があるわけではない。個人的な願望と公共的義務との間には数多くの緊張が生じうる。この問題の克服の主な方法は、問題の個人的

対し「空想社会主義」と名付けて切り捨てたことがあげられようが、最も大きな理由は、共同生活体の構成員が、彼ら独特の規範と価値観に閉じこもって生活するためにみずからを孤立させたからであった。

対照的にキブツは、自己目的として構成員各自のために理想的社会を建設するというだけでなく、シオニズム社会主義労働運動に特有な、民族的、社会主義的目標への達成の方法として建設されたものであった。キブツは社会からの避難所だったことはなく、常により大規模な社会的闘争のための基地としてみなされた。闘争の目標とそのための方法は時代とともに変わってきたが、必ず個々のキブツの運命と一般社会の運命との間のつながりが認識されていた。

過去において主な闘争は、ユダヤ人労働者と農民の形成、および農業の発展に関わるものであった。このキブツという集団制度がこれらの目的の達成に最も効果的方法であるとみなされていた。今日、この伝統的志向に加えて、若い世代層は恒久的なキブツ制度を確立すること、工業化と生活水準の向上に付随する社会的疎外と自己疎外の現状に対する、もうひとつの社会の創造を探索している。

内面化と集団的目標への個人の献身である。それゆえ、社会的義務は、個人に対しては、彼の支配を求めて止まない外部の力としては、あらわれてこないだろう。たとえばキブツでは採決の直接民主主義的な過程を通して、各個人は既存の優先価値順位を議論し、最終的に影響を与えうる機会を持っている。他方、集団的目標の内面化によって、各個人は、最初の彼の立場とは対立するかもしれない、集団の決議に従うこととなる。彼はこうした決定を、個人的な願望と外部からの圧力との相克の結果として観るのではなく、むしろ彼自身の内面に持つ既存の相反する二種類の価値の拮抗の結果として観るのである。このようにして、より大きな理念的公共的目標に投企することは、従って個人と社会との統合の役割も果たすこととみなすことができる。しかし、目標の個人的内面化は、それ自体、個人の社会化と、集団の生活また集団の理念への長期の教化過程がもたらした結果でもあるのである。今日、すべてのキブツ運動は、かつての意見の食い違いを越えて、キブツにおける生活の成功に必要な条件は、青少年期の教育であることを認めている。この種の教育の目的はキブツ的諸価値の内面化であるだけでなく、

部分的な集団、共同生活形態の体験であり、キブツの社会的構成要素である、結束力を持った仲間集団の結成力である。こうした教育の過程には、同時に、選択の余地があり、キブツに受け入れられた人びとが共同体的生活の特別な規範や義務に喜んで同化し、また同化することが可能なようになっていく。

## 5 社会統制

前に見た内面化の過程はまた、すべての反社会的行為を最少にするものであり、キブツは社会統制のための特別な機構をほとんど必要としない。社会統制の中核をなすものは現在においても輿論であり、規範的な行動に対してはみな敬意が保証され、その反対の行動に対しては批判が向けられる。ただまれには、たとえばきわめて異常な行動をとる者があつた場合に限り、キブツは除名という手段に訴えた例もある。

キブツのこの非公式的な社会統制の構造は、他の共同体的試みにおいても共通にあつた、より一般的な一連の問題を提起する。共同生活は新しい形の社会的疎外現象を、またへ他の方向に向かった「画一化」を産み出している

のではないか？ 共同生活体は、個人の自律のための条件を作ること成功しているのか、あるいは公的批判への恐れが逆方向性の現代社会にみる法への恐れにとつてかわつていないのではないか？ より小規模な集団への愛着（所属意識）を、社会的関係の（選択の自由）や、あるいはまた、より広い接触を持つ機会と並立させることができるであろうか？そこには選択の自由と多様化した社会的関係との接触機会のロスを償うに足るものがあるのか？ 一体、家族はその社会関係にあつていかなる位置を占めているのか？

みずから周囲の社会から孤立したために、数多くの伝統的な共同体は、それに所属する構成員間の小さな枠内における人間関係に終止し、広範な社会的接触の機会に欠けていた。とともにこの社会的接触の制限は、故意の社会統制の方式であり、固有の規範に同化させる一つの方法でもあつた。多くの共同生活体は、また、公衆の面前で行なう告白や、背反者の破門など、屈辱、苦痛を与える方法を用いた。家族に対する献身が共同体への献身と相争うことを恐れて、多くの古典的共同体は家族に対しては否定的な見方をしていた。そうした多少とも意識的な相克に対する危惧の

## 6 家族

最も重要かつめざましい変化が、キブツの家族のもつ役割の中に生じてきている。キブツ制度は若い独身者たちのグループによって創設されたとき、キブツの構成員であることと同時に家族の一員であることの間、ある拮抗が生じるのではないかといった危惧が持たれたことがあつたが、実際は、キブツはなら家族のもの否定しはしなかつた。今日、家族は経済上、消費上の単価としての役割は持たず、唯一、社会化ならびに教育の過程において部分的な役割を果たしているにすぎない。とはいえ家族はキブツ内の社会的および情緒的統合において、世代間の紐帯として十分に重要な地位を占めている。

## 7 科学技術と民主制

現代の科学技術の専門化への要請と、一般通念となつている民主的採決方法との間に、基本的矛盾が存在するだろうか？ 現代産業の管理運営のためにとり入れられた複雑な組織と、階層化や官僚化をまねがれた政治形態

あまり、多くの共同生活体は独身主義とか、性的関係の制限などの手段をもつて、社会の基本的な単位である家庭のもつ重要性を限定したのであつた。

キブツにおいては、現代マス社会に特徴的な、集団の中の孤独、疎外、無名性の感覚を仲間集団への、あるいはキブツ自体への愛着によつて、ほぼ全面的になくすることができる。集団の構成員であることは人間の中の真の協同、協力の条件である。帰属意識と運命の共有感覚を育てる。これが必ずしも他の方向への「画一化」、自己欺瞞に導くといえるであろうか？ たしかにキブツのメンバーは、ときおり彼の行為に対する仲間達や同胞の反応が気になり、内心あれこれ悩むことはあるであろう。メンバーにとつて同胞の敬意はきわめて重要なものであり、彼らの個人的行動や決断は、その敬意を失うことを避けようとし、批難的になることを避けようとする願望によつて影響されている。これはまた規範を実現する一つの精神構造でもある。

問題は、これが世の批判家によつて言われている、キブツの広報機関への画一化、輿論への同化、高度なレベルでの組織的階層社会への解消、と同じことであるのかということとを組み合わせることができだろうか？ 社会階層の頂点に位置する、高報酬の管理者と、底辺に疎外されている労働者との間に横たわる格差を取り払うことは可能であるだろうか？

フランスの労働者組合方式、およびドイツの労働共同採決の方式は、こうした問題をそれぞれ相異つた方式で手がけようと試みたが、なら現実的解決をもたらしはしなかつた。ユーゴ方式はこの問題に、公選による労働者協議会の代表者が採決の過程に参加するのを認めることで、部分的には成功した。ここでは、社会階層の廃棄の問題は試みられはしなかつた。あいかわらず差別賃金一般的で、技術主義のみたらし疎外の克服を目的とする労働組織においても、わずかな変化が起こつたにすぎなかつた。しかしながら、その方式は、労働者の自分達の組織に対するより強い献身と同一化の精神を創ることに成功したのであつた。

## 8 キブツ的解決

これとは対照的に、キブツはメンバー各個の要求を充足するために直接的な責任を負つ

である。しかしながら、キブツにおけるくだけた、直接的な人間関係は、暗黙の了解や、わざとらしい人間関係を拒んでいるように見えるのである。そのうえ、キブツの外部への開放性、全国的な運動の一環としての他のキブツメンバーとの連繋、キブツ理論の柔軟な性格などがあいまつて、古典的共同生活体の開いた社会統制の機構や懲罰を不用なものとすることができた。社会統制の一構造としての輿論は、威圧的な権威としてではなく、むしろ成文法や憲章を持たぬ社会でのガイドの役割を果たしているとみられる。

今日の主要な問題は、社会の分散、労働の分化を含めた内部分裂が、輿論のガイドとしての役割を困難にしている、巨大キブツの問題である。この問題の解決には、キブツメンバーの属するさまざまな小グループの、強力な結束が必要とされる。それも労働集団や、仲間集団の中心的役割の上に再編成するのでなく、むしろ各小グループが個人とキブツの仲立ちとなるような形での相互交流構造を作ることである。この構造はすでに、労働集団、家族集団、隣近所などが異つた世代の出会いの場所になつていることにみられるように、統合作用を果たしているのである。

ていて、各自異った職能を果たしている各メンバーに対して、差別的な経済報酬を払ったことはなかった。前述の通りキブツには公的な懲罰制度もないので、労働者集団の輿論による自主規則と自主管理だけが旧来の階層的統制に代わるものである。とはいっても、そもそもその動機は労働自体から来ている。実際の労働の機会（興味ある仕事、個人的能力を発揮できる仕事、など）のあることが、労働者の満足にとって最も重要な要素であり、これが逆にキブツへの献身を約束する要素ともなる。したがって、すべてのキブツメンバーに対してこのような、職業の機会を提供することが、主要な問題であると言えよう。

## 9 持ち回り方式

多様な労働機会の提供は、すべての労働がメンバーだけによって果たされなければならぬ共同組織にあっては、そう容易なことではない。こうした問題を処理するために案出された方式が持ち回り方式である。これは、(1)人々があまり興味を持たぬ仕事や、比較的満足感の少ない仕事のため、また、(2)キブツの管理的地位に人をあてがうため

に利用される方式である。

熟練者の不足のために専門的な労働にはこの職能持ち回り制度は適用されない。けれども、この方式は管理的職能および組織面に連するすべての職種、そして同様に、キブツ運動とキブツ連合内における、キブツ外の仕事のすべてに適用される。管理運営にあたる者は特権や例外的な報酬を一切受けず、こうした公的な労働の期間が済めばそれぞれの職場に戻るのである。こうした公共奉仕の期間、経済部門では一二年、キブツ以外機構においては三五年とまちまちである。管理担当者として、一日の全労働時間を任に当たる少数の者に加えて、メンバーのほぼ半数がキブツ生活のさまざまな実質的側面を受けもつ各種委員会に参与している。

この行政的役割を果たす委員会への参与によって（これは通常の労働時間後、自由意志によって開かれる）キブツ制度は、あの伝統的な、行政、立法、司法各部門の分離を克服している。一週間に一度開かれるキブツの総会は、直接民主主義の立法的職能を果たすばかりでなく、キブツ生活のあらゆる領域に関する決定を行なう。これに似た形で、農業と工業の部門の各職場ミーティングも行なわれ

る。

比較的新らしい現象であるキブツの工業部門は、農業部門に比してかなり大規模で、複雑であるが、財政的には非常な成功を納めている。この部門には多分、キブツにおいて唯一、技術管理者と労働者という階層的組織がみられ、農業部門に見られるような漸進的組織構成を許さなかったほどに急激だった、キブツの工業部門の成長を物語っている。今ここにキブツの他の原理によりマッチした組織形態を導入しようという特別な努力が払われている。職場会議はその階層構造にもかかわらず、最終決定を下す場として継続されている。

## 10 キブツと運動

キブツ内における民主制は、同じくキブツ運動の中核をなしている諸制度の民主的な性格のうちにもみられる。各キブツがその内部に設置している諸機関と同じように、キブツ運動の経済、教育、文化、政治などの制度の中にも先の持ち回り制が行なわれている。重要な採択機関ではすべての加入キブツの意志が直接反映され、比較的重要性の薄い決定機関では、直接あるいは間接代議制により運営

されている。各キブツは地域的あるいは全国的規模の、大きく強力な協同組合組織に組み込まれている。その組合は労働財政（イスラエルの国家財政のほぼ二十パーセントに相当する）の一環としてキブツ運動によって組織されているものである。この組織と、キブツ間の相互援助方式の併用のおかげで、失敗に終るキブツはほとんどない。キブツ運動自身

が、新メンバーを獲得すること、青年運動の面倒をみることに、新しいキブツを創ることにそれらの発足時の発展、などに対して全的責任を負っている。

キブツの試みた経験を一般公式化しようと試みることは明らかに危険である。この経験には抽象的判断を下しえず、イスラエル社会の成り立ちと発展に固有の、他の高度工業化社会の現状とは異なる地域的、文化的、経済的、また政治的背景のなかで、とらえられねばならない。

個々のキブツの周囲の防壁として、この強力な協同組合組織はキブツ運動を成功に導いた重要な要因である。過去、経済的、政治的諸条件の不備を克服するに必要な援助を与え、現在、最近の工業化と近代化によって生じる諸困難に必ず、計らっているの

である。

## II 結 語

この評論は新たな社会秩序への模索としての、新しい制度の建設に関する基本的問題のいくつかを明らかにしようとしたものであった。さまざまな共同体的小社会への試み、とりわけキブツ運動は、三つの基本的問いを提出している。

(1)あるひとつの試みを一般化し、他の試みにあてはめられるか？

(2)特に、キブツ運動の教訓を他の小社会に適用することができるか？

(3)いくつかの解決策と機構を含む、キブツの経験の一部のみを切り離して、他の小社会に適用しうるか？

キブツは一般的に、青年運動において共通の基盤をもつ小規模な、同質的集団によって創り出された。彼らの共同生活体は主に集団農場を中心に、単純な社会的、経済的単位として機能した。彼らの生活水準は比較的低かった。一方、現在のキブツは二ないし、三世の構成員を持ち、農業に限定されてはいず、急速に工業化され始めている。

今日このように工業化が根づきつつあるので、キブツは現代工業社会のような様相をとりつつある。そしてキブツは、工業社会により適合する共同生活体である。キブツ運動は、工業化の副産物である専門化という状況に対して、その運動を支えるであろう理念を、その過去に依り頼まねばならない。このような状況のもとでのキブツ運動の成功は、他の国々にでの新たな、よりよい社会の探求に確信を与えることができるかもしれない。

一般化が必ずしも正当ではないが、キブツの制度は、明確に次の二つの領域においては意義をもつであろう。

(1)キブツの経験は、社会的問題に対し固定した方法によらず、従来の方法によらない解決の可能性を試みた、ひとつの実験とみていいであろう。

社会科学の領域にあっては、文化的相対主義の思想が一般に受け入れられていて、私有財産への欲望、男女関係の独占欲など、人間の本性の本質から社会的構成や社会制度を論証しようとする試みはまれである。しかしながらこういった偏見は強く一般社会に根づいている。同時に、より新しい諸理論（例えば、社会層形成に関する機能主義理論）は、不平等

の普遍的存在を社会の機能的な要請によって説明しようとしている……などである。このような枠内にあつて、キブツシステムが持つ従来ない制度への科学的探求は、たんに社会科学知識を深めるだけでなく、平等とか直接民主制とかいうような非従来の諸価値が、いつか実現されるかもしれぬという可能性の実証例として使われるかもしれない。

(2)キブツにおいて成功した特殊な制度構成は部分的には、恐らく異つた状況に対しても適用しうるであらう。

(4)地方の過疎化と都市の巨大化を避けるための地方の工業化に、キブツの経験を援用する。

(回)キブツの集団主義教育に触発された、教育制度の創設。

(イ)経済、社会、文化、政治的組織の民主的運営への修正。

別個な制度上の機構を、キブツの経験にもとづいて他に導入することの可否を検討する際、主な困難は、キブツの社会制度が機能的に相互に依存しあつてゐるという事実にある。キブツの社会構造の最大特徴は、生活空間と、社会、経済的な生産空間の二つの重なり合い、

同一化である。労働活動ばかりでなく、ほとんどすべての、社会的、文化的、政治活動は、キブツという枠の中に含まれていて、オルポートの定義つけたように、一体化という心理現象を産み出している。(ほとんどすべてという限定は、キブツメンバーのうちでキブツ連合の中央組織に働くもの、例えば労働組合などでキブツを代表して、キブツ外の組織で働くもの、などの例外を考慮したためである。しかし、これらのキブツメンバーの数はとるに足らぬ程わずかである。)

そのうえキブツの機能上の相互依存性は、相異なる、制度上の機能、様式のあいだの結びつきによつて表わされている。例えば、管理的機能の持ち回りは、賃金、地位の差別がないという制度上の機構によつて、はじめて可能であり、同様にして、女性の、労働と社会生活上の平等は、共同消費や集団教育の制度によつて保証されるのである。ゆゑに、互に異なる、特定の制度上の機構のみを、総合的、機能的相互依存の背景から切り取ることの可能性について、理論的解答を与えることは容易ではない。試行錯誤の過程を通じてのみ、より確定的な解答が得られるであらう。

教育の変革、女性の社会的地位の確立、自

主管理や共同管理の新しい方法の探求、極端な都市化への歯止めの方法、……などのいろいろな社会生活の分野に、根本的変革をもたらそうとする試みは、キブツで成功した方法を採用し、キブツの限界、不足を繰り返さぬようにすることによつて、キブツの経験を創造的に活用できるのではないかと思われる。

(New Outlook 七一年九月号より)

### 〈研修生の行くキブツ決定〉

今春四月四日出発予定の第九回研修生、総勢六十六名の入るキブツが決定しました。AからEまでの五つのグループに分かれ、半年間滞在します。

なおこれらのキブツは、イスラエル側日本人受け入れ委員会、現地に居た中村二郎君などの助けを得て、十ほどの候補キブツを選んでもらい、最終的に協会側で決定したものです。ギネガールを除いて全部はじめて日本人を受け入れるキブツです。

- A——クフアール・マサリック
- B——ギネガール
- C——ネティイウ・ハラメッド・ヘイ
- D——クフアール・マカヒー(予定)
- E——バルカイ